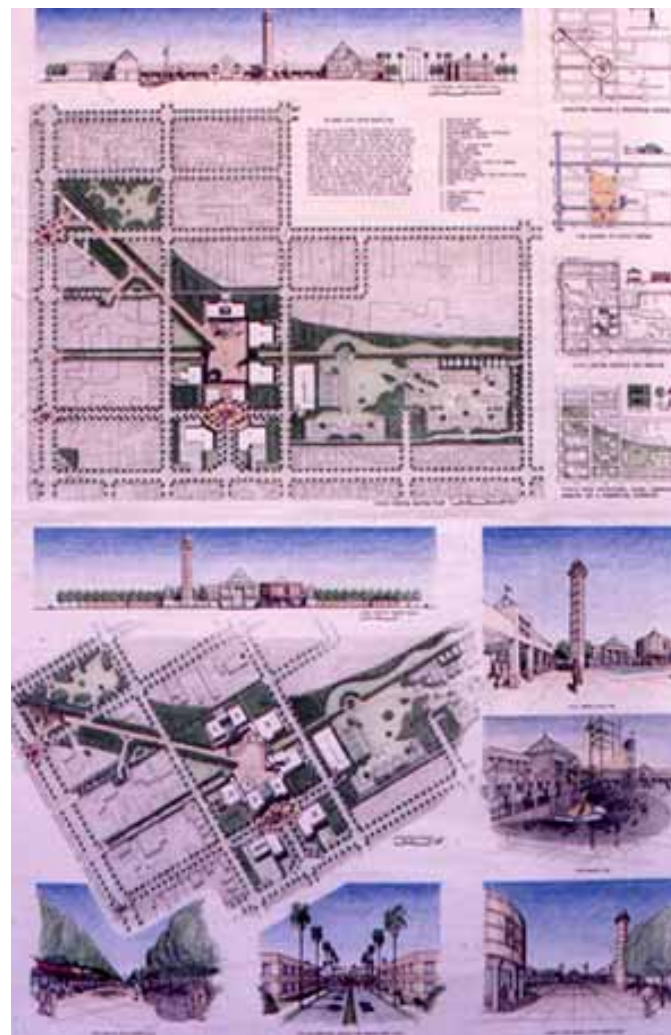


## 6 未来へのフロンティア、 カリフォルニア

### 6.3 井上邦雄建築設計事務所を設立

1980年代の後半に、アメリカは不景気に入った。特にオイルでブームタウンだったヒューストンの落ち込みはひどかった。オフィスビルを建てすぎて、多くの超高層ビルが大半空室になってしまった。その不景気のおおりに受けて、一時は、200人近い所員がいたSOMのヒューストンのオフィスが閉鎖された。大半の所員が人員整理の対象となった。キーティングと彼が育てあげた優秀な部下達が、シカゴのオフィスの指示で、ロサンゼルスに送られて来た。キーティングは、ロサンゼルスで働いていたデザイナー達を徐々にクビにしていった。彼は、ヒューストンから連れてきた部下達だけで、ロサンゼルスにオフィスの体制をかためた。私のかつてボスだったマリスやその部下全員が強制的な退職となった。SOMの中にも大きな派閥の様なものがあったのである。日本の徳川時代の城主の変換とか城の明け渡しなどを思い出した。「私は皆をクビにしたくはなかったが、これは、シカゴのヘッドクォーターからの命令だからしかたがなかった。私は恨まれ役になったのだ。」と後でキーティングから聞かされた。その彼から電話があった。「どうだ、SOMにもどってこないか？」という話だった。その時、私は自分で事務所を始めようかと思っていたので丁重に断った。



ヘメット市(ロサンゼルスから東160kmにある市)シビックセンターのコンペの作品、300近くのエントリーがあった。勝てなかった。1986年設計

スパニッシュスタイルの家1988年設計、ランチョパロスパーデス市。市より赤茶色の屋根瓦使用の要求があった。この市も平らな屋根の家の認可はおりなかった。

2x4の木造の構造体の工事現場、海側に大きな開口部を作ったので耐震壁が少なくなり、残りの壁に木板の下の補強が必要となった。





サンマリノの家の模型。2階建ての家となったが、両隣の家が1階建てだったので街並みのハーモニーとスケール感を合わせるために両サイドの屋根を1階まで下げた。1990年設計



古典的現代的折衷のデザインのサンマリノの家。市の要求によりフロントはアメリカの伝統的なスタイルの家にしなけりばならなかった。

1980年代の後半、日本はバブルの時代に入り日本のバブルの金がアメリカに入ってきた。そして日本の多くのゼネコンもアメリカに事務所をかまえた。ピーター・ケミニッアーの設計事務所で大きなマンションの設計が終わった後、事務所が暇になった。そして間まもなくして倒産した。

1986年、「Kunio Inoue and Associates」をロサンゼルスに設立した。プロジェクトやクライアントがあって事務所をつくったわけではない。だから、当初はどのようにしてプロジェクトを得るのかわからなかった。最初は自分の家の一室を設計室にして仕事を始めた。最初の仕事は、アメリカ人の友人の家の設計だった。コンペもいくつかしたが勝てなかった。暫く仕事がなく、暇だったので、友人の設計事務所の手伝いもした。その後、知人の紹介でいくつかの住宅、集合住宅の仕事が入ってくるようになった。自分の家にクライアントを呼んで、ミーティングするのもしにくい。それに私生活と仕事を分けたかったので、事務所を借りることにした。ロスアンゼルスダウンタウンの近くの、高層ビルの5階に小さい事務所を借りた。そのビルの前はエコーパークという公園で、ヤシの木や、きれいな湖が見えた。ロサンゼルスダウンタウンもよく見えた。そのビルの屋上には、ヘリコプターが常時3機止まれるようになっていた。私の`アメリカでの設計の経験は、超高層や大きな建物がほとんどであった。しかし、事務所を設立して、仕事を始めると、増改築、内装設計、個人住宅が主な仕事になった。いくつか良い住宅を設計



玄関先の柱の大理石のベース。それでも、詳細は現代的なものにした。

高級住宅地サンマリノ地区は家を建て替えることはほとんどなく、市当局は新しい住宅でも表通りに面しては伝統的な建築のデザインにする規制がある。



すると、いつのまにか住宅専門の建築家といわれる様になっていた。

ネオクラシックデザインのパーティー用のリビングルーム。住居者は2人だけだった。

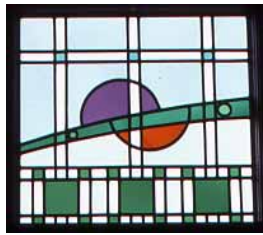




サンマリノの家、バックヤードに面しては開口部を大きくし又、幾何学的な形の現代的デザインを強調した。



2x4の木造壁式構造体であったが開口部が大きすぎたこと、大きな吹き抜け空間があったことで、耐震用に沢山の鉄柱梁を入れなければならなかった。



太陽と月と自然をテーマとしたシリーズでデザインしたステンドグラス

しかし、住宅設計は難しい。「建築は住宅で始まって、住宅で終わる」と言われるくらい、主婦や学生でも設計は出来るが、しかし、建築家が一生かかっても、本当に良い、完璧な住宅は設計できない。空間構成、材料の選定、人がいかに生活するかなどを考えれば考えるほど難しい。巨匠と呼ばれる建築家も、晩年まで完璧な住宅を創ろうとして闘い続けている。

アメリカでは、特に南カリフォルニアにおいては、いろいろな環境の異なった国々から来た人達が沢山住んでいる。最近では白人の高級住宅地に、アジア系の人達が多く住むようになった。彼らが建築工事のため認可を得ようとする時は、その住民達から反対される可能性が多い。多少人種差別的なことを感じないわけでもないが、各市に異なった建築法規や用途地域の規則があるにもかかわらず、強引に自分の国の方法で建てようとするからである。又、高級住宅地域には、家の美観等を監視するホームオーナー・アソシエーションがある。さらに、それらの市に、異なった建築デザインの審査委員会があり、家を建てるには公聴会で、設計のプレゼンテーションをし、これらの審査委員会の特別な認可を得なければならない。施主を説得するのは、比較的楽であったが、この委員会の7人の市のメンバーから認可を得るのは難しかった。この委員会によって何度も何度も設計変更をさせられることがあった。サンマリノ市の高級住宅地に建てる大きな住宅の設計をした時、その建設予定地の隣に弁護士が住んでいた。彼は私の設計に真っ向こうから反対した。法的には何も違反をしていなかったが建物が大きすぎるとか、建物の位置が良くないとかの理由をつ

けて、隣近所から反対の署名を集めた。クライアントが誰だかわからない程に、いろいろな要求をしてきた。市の建築委員会からも、外観やランドスケープに対して厳しい要求があった。当然のことながら、クライアントからも彼等のドリームハウスとしての要望があった。



サンマリノの家、インテリアも伝統的と現代的折衷のデザインとなった。大理石、木材とのバランスを考慮し10色以上の塗装の色分けをし壁天井の石膏ボードに塗ることになった。左画像が朝食の部屋、右画像はリビングルームを見る。





ハリウッドの家、1996年設計、暖炉となるところの外側が竹藪だったので暖炉の周りの壁をガラスにし、昼となく夜となくグリーン竹の葉の動きを見ることが出来た。

曲線の壁の主寝室と8度傾いている壁の子供部屋をブリッジでつなく吹き抜け空間。



結局、設計を全部やりなおしになった。。建築家としての設計の主張を最後まで持ち続けることはたいへん努力がいる。このサンマリノの家の設計には私は造園外構、ステンドグラス、ファニチャーなどすべての設計をした。設計はバランスであり、総合芸術であるので、住宅ひとつを設計するにも、周囲との調和を考慮しなければならない。さらに将来の住宅地、将来の街を念頭において、設計していかなければならない。

建築はその時代を反映して、その時代の文化を表象する物として残るからである。ここで私にとって大事なことは、物（建築）をつくっていく態度である。伝統的なスタイルの建物をつくることは応用力であって想像力ではなく、又、その時代の文化を十分反映していくと私は思えないのである。しかし、そうは言っても、建築設計はなかなか自分の思い通りにはいかない。

市やクライアントや、ハウスイフからの要望は受け入れなければならないからである。この家は、私が金を出して建てる家だからと言って、壁をピンクに塗り、窓の枠を青色に塗ってしまったクライアントもいた。設計の途中で、意見が合わず、設計費をもらわず、設計を辞退したことも何度かあった。しかし、うれしいこともあった。限られた予算で、私の意図通りに、マリブの海の近くに住宅を設計した時のことである。その住宅は、青い空、青い海にマッチした、真っ白なコンテンポラリーの家であった。クライアントは、最初、変わった家なので少し抵抗があった、という。しかし、住めば住む程、家の良さ、住みやすさが分ってきたという。又、何人もの人が家の写真を撮っていき、何度も映画のロケにも使われた、とクリスマス・カードに書かれてあった。この他にも、同じ様な手紙や電話を何人かのクライアントからもらった。こんな時は、嬉しいものである。アメリカの住宅は、主としてツー・パイ・フォーとよばれる木造壁式構造で建てられている。南カリフォルニアは雨が少なく、乾燥しているので、メンテナンスがよければ、半永久的に住む



模型、マリブの家、1992年設計、比較的小さい家であったがオーナーからの要望で屋根尽きの車寄せを家のフロントにつけた。

マリブの家、吹き抜け空間の中をブリッジでマスターベッドルームに渡る。





オーナーから送られて来た映画のロケの写真。

ことが出来る。アメリカの場合は、家族構成が変わったり、収入が良くなったりすると、家を買換える。彼らは住宅を不動産というより、動産的に考えている。家の売買を投資的に考え、次に売る時のことを考えて買うのである。従って、採算の合わない、住宅の建て換え工事はあまりしない。最近是新築工事は少なく、増改築の工事が多くなっている。

新しい家を建てる場合には、いろいろ問題がある。まず土地の問題であるが、ロサンゼルス近郊の場合、家を建てる土地は、もう急斜面の土地や、市街地から遠い郊外にしか残っていない。それに、新しい住宅の工事は、約1年から2年近くもかかる。それは工事の過程で、市の建築課の係官による現場の検査が厳しく、1件の住宅を建てるのに20近くの検査がある。検査のひとつひとつをパスしないと、次の工事の過程に進めないのである。又、12月のホリデーシーズンや、夏のバケーションシーズンになると、市の係官や、サブコンがバケーションをとるので工事がストップする可能性が多く、工事の長びく理由である。私の設計は、複雑な形が多く、図面の上には描き表せない部分がある。そういう時は、現場にサブコンを集めて、設計について現場での基本的な概念のレクチャーをした。しかし、それでもよく工事を間違えられた。打ち放しのコンクリートに、ペイントを塗られてしまった時は、つらかった。どんな小さなプロジェクトであっても私はその設計の中に何か新しい概念や形を取り入れる様に心がけている。どうしてこんなに難しい形をつくらなければいけないのかと自分で悩む時もあった。

ある内装工事の時、工事期間が十分でないということで、アメリカ人の現場監督が、オーナーから直接認可を得て、設計図と違う簡単な形に変更してつくっていた。私にしてみればこだわりの形、線であった。今回は、この監督と口論しまいと丁重にお願いして図面ど通りに直してくれる様にお願いしたが、“NO!”の一点ばりであった。彼とは以前のプロジェクトでも何度かやりあったことがある。私のフラストレーションがついに爆発して“こんなものをつくるなら、つからない方がいい!”と、どなって、その壁の石膏板を思いきって蹴ると大きく穴があいて壊れてしまった。その後、「Mr. Inoueは気にくわないと、建物をこわしてしまう」という、うわさが日系人のコントラクターの間に広がった。



コンテンポラリーのホワイトハウス、マリブの家、1992年設計。交通が激しい表通りであったが市の規制でフェンスを作れなかった。騒音と強烈な西日を遮るために小さな開口部のガラスブロックだけの窓となった。バックヤード、反対側は大きな窓だけの家となった。



レストラン、歌舞伎、ラスベガス市、2000年設計、日本の折り紙のような複雑な天井と壁の工事現場。

[www.kiparchit.com](http://www.kiparchit.com)